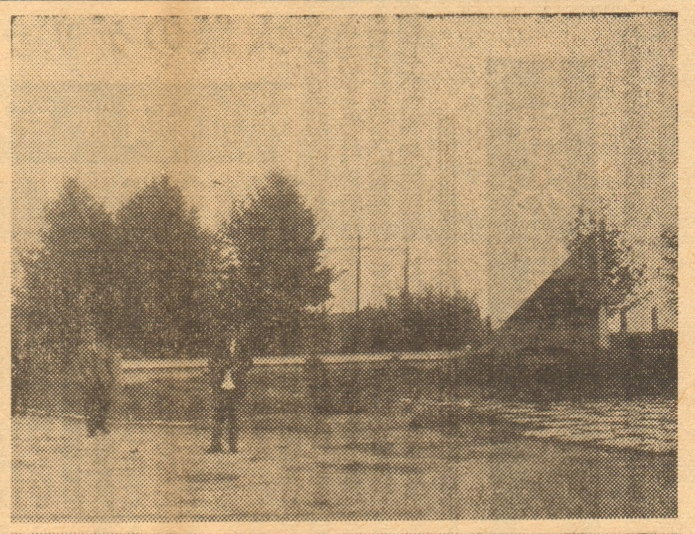
一九四一年六月二十二日でした。それから九百日間、この町では子どもも年よりも戦い抜きました。たくさんの市民がたおれ、そしてたしは笑えなかった。この春、東京でひらかれた「ソ連展」での説明文にあった〝食糧は一日この一切れの一二〇㌘、それも小麦粉



てくれたのは市の労組副議長（婦人）であったが、この人も十一歳のとき戦争孤児となった、とイワノフ労組議長がおしえてくれた。親の一人、二人を戦闘で失っていた。見学をおえて休憩室で交歓をしたが小ぶりの、五十がらみの婦人委員は、机上にあったパンの

激戦のおこなわれたプルコーワ台の戦跡記念碑と周辺（ソ連兵はここで狂暴なドイツ軍を阻止した）㊤。レニングラードではロシア革命に参加した老闘士たちが日本代表に親しくあいさつした（スモールヌイ宮殿ホールで）㊦

秋の闘いへ意志統一

一部のネオトロツキズム的偏向正す

民学同第八回臨時大会開く

民主主義学生同盟第八回臨時大会は、全国各地から多数の代議員が参加して九月一日大阪で開催された。大会では春期活動総括のうえに秋の闘い――ベトナム反戦、佐藤ベトナム訪問阻止、訪米阻止、国立大学授業料値上げ反対を全国学生共同行動として闘うこと――を確認し、新指導部を選出して同日閉会した。今大会での討議の大きな特徴は民学同内部に公然とネオ・トロツキズム的偏向が発生したことである。しかし、それは学生運動の正しい発展を願う多数の努力と批判によって克服された。

大会での討議の焦点は、㊶ベトナムの情勢をどのように把握するか❷平和共存の内容と理解❸核拡散防止条約と日本帝国主義、砂川問題、七〇年安保について❹学生運動統一の問題について❺以上全体を含む小ブル的あせりと極左行動、ネオ・トロツキズムに対していかに闘うか、という点に集中された。

討議は以下のように展開された。

＜ベトナム情勢と平和共存＞

ネオ・トロツキズム的傾向は情勢の評価に際し「ベトナム戦争は現代世界の矛盾の結節点であり、米帝を盟主とする戦後世界資本主義の構造的諸矛盾の集中的、危機的表現であり、現在これに米帝が敗北することになれば一挙的ともいえる新旧植民地主義体制の崩壊になり、先進国危機と後進国危機の連鎖的進行となる」という主張としてあらわれた。しかし、これに対しそれは危機感、焦燥感によって「世界資本主義の危機」などと叫ぶことによって情勢をまったく主観的あせりでとらえている。そこからはせいぜい空文句しかでてこない。

さらに多くの代議員から、このような主張からは「危機だから先進国革命の位置づけを？」とか、「戦争と平和の対決点はベトナム、これこそずべて」とかいったものより他にでてこない。それには平和と平和共存を守る支柱＝社会主義世界体制の巨大な役割はでてこない。また帝国主義者の世界中でくりかえされている戦争挑発と戦争政策、軍拡競争に反対する闘い＝核防条約はその一つ＝の意義はでてこない、と説得的に反論がなされた。

そしてベトナム侵略に米帝が失敗するなら、世界帝国主義は危機におちいり、新旧植民地はしょうぎ倒しになるという意見につらなる、ドミノ理論のトロツキー版に他ならなくなるではないか、と熱心に同志的な反省を求める発言がなされた。

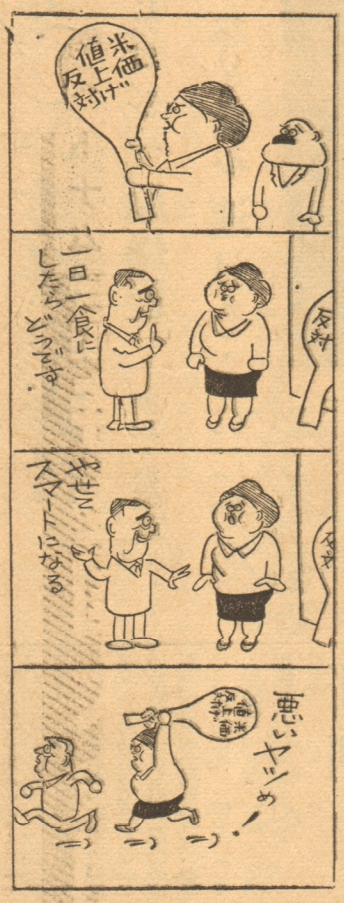
＜七〇年安保について＞

「七〇年安保は、一大政治決戦、階級決戦である。それをとらえることこそ先決」という意見が、平和共存政策の否定的見解に続いて一部から主張された。

これは「砂川で実力肉弾戦を？七〇年でロシアの一九〇五年を？」というような危機感や悲壮感をうえつければうえつけるほど、大衆は起ち上るのだという誤った小ブル的思想であること。それは焦燥感にかられた抽象的な情勢把握や情緒的なアジテーションに終始、満足し、そこには激情的な反抗以外のものは生まれてこず、核防条約の重大な意義、当面するベトナム反戦を全力をあげて闘い抜くことの意義がでてこず待機主義となると圧倒的な批判が行なわれた。

＜学生運動統一について＞

また学生戦線統一の問題では主として京都の一部の代表から京都府学連の問題をめぐって「二つの府学連が存在している中で、両者の存在を認めず独自運動をはかるべきである」という主張が展開されたが、しかし、それは京都学生運動の歴史的経過と大衆運動の存在を無視し、ことにその中で、問題の所在が民青のボイコット＝分裂戦術によって民主的大衆的な京都府学連が分裂させられ、第二デッチ上げ「府学連」が結成されたことを完全に無視している。それを忘れるなら、われわれは第二の分裂主義者となる、それを語らず自己運動をというのは、単純なセクト主義と主体性論である、と批判がなされた。民学同のこの間の学生戦線統一のための政策の正しさは、このようなボイコット＝分裂戦術を一貫して拒否してきたことにある点が確認された。」



大阪で開かれた民学同第八回臨時大会